

医療ルネサンス

No8499

シリーズ
●●●薬

医療費を考える

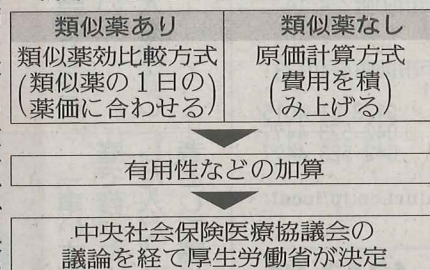
2 / 5

新薬値付け方式 疑問の声

少しでも自立して過したい。そう願う患者の期待が高まる中、2023年12月、アルツハイマー病治療薬「レカネマブ」が公的医療保険で認められた。脳内の異常なたんぱく質を除去し、病状の進行を抑える初の薬で、エーザイが開発した。薬価(公定価格)は体重50kgの場合は年298万円だが、高額療養費制度で自己負担は抑えられる。一般所得層の70歳以上では、年14万4000円だ。東京都健康長寿医療センターでは、これまで108人がこの薬の治療を受けた。脳神経内科医長の井原涼子さんは、「治療期間は最長の患者でもまだ1年半弱。値段に見合った効果があるかが分かるのはこれから」とする。

新薬の値段は、厚生労働相の諮問機関・中央社会保険医療協議会(中医協)の議論を経て、厚生労働省が決める。レカネマブは「原価計算方式」と呼ばれる算定方法が採用された。原材料費や労務費に研究費や利益も加味し基礎額を定める。議論の焦点は、薬の価値をどう考え、基礎額から上積みするかだった。有用性を評価する加算は3段階あり、エーザイは「治療をやめても効果が続く」「進行を抑えることで介護費を減らせる」と主張、最高評価の加算を中医協に求めた。認められれば基礎額の1・

新薬の値付けの主な流れ



薬の値段が議論される中央社会保険医療協議会(4月、東京都内)

7・2・2倍の値段が付く。だが、中医協の下部組織は、「介護費に関する分析は現時点で難しい」などと判断、最高評価は見送られた。中間の加算が認められ基礎額の1・45倍の値になった。24年11月に発売されたアルツハイマー病治療薬「ドナネマブ」は、効果や作用が近いレカネマブを踏まえ「類似薬効比較方式」で基礎額が決まった。1日あたりの薬価を既存薬と同じにする方法だ。その上でレカネマブより早く治療を終えられる点で加算がついた。こうした値付けのルールに製薬業界は問題を提起する。原価計算方式は①加算の額が抑制される②研究開発にかかった費用が十分に加味されていない。などの場合があるとして類似薬効比較方式の対象を広げて薬の価値に応じた値付けがされるよう改善を求める。一方、健康保険組合などの保険者らは、高額な新薬が多く使われて医療費が膨らむことを懸念する。例えばレカネマブはピーク時の31年度には3万2000人が使い、年間の薬価は986億円と予測されている。法政大教授の菅原琢磨さん(医療経済学)は「日本で新薬開発を活性化させるには、技術革新をより評価しやすい算定方法を探ることは必要。ジェネリック医薬品(後発薬)や特許切れの薬の価格はさらに下げるなどメリハリを付けた対策が求められる」と指摘する。